

悲鳴は、鮫島が脱いだジーンズとボロシャツをたたんでいるときに聞こえた。鮫島は一瞬手を止めたが、ロッカーの扉を閉め、鍵をかけた。鍵はマジックテープのついたリストバンドで、手首に固定する仕組みだ。

バスタオルを腰に巻き、ロッカー室を出たところで、再び悲鳴が聞こえた。

ロッカー室が面した廊下のつきあたりには、サウナ風呂がある。その手前に、休憩室と仮眠室があった。

悲鳴は仮眠室からだった。

仮眠室は二十畳ほどの広さだが、電球がひとつしか点つておらず、ひどく暗い。

新大久保の駅に近い、雑居ビルの最上階にあるサウナだった。鮫島がこのサウナに足を踏み入れるのは、この二週間で五度目だ。

サウナは、その種の趣味を持つ連中にとつては、有名な店だった。風呂から出て、休憩室で

互いを値踏みしあつたあと、仮眠室の毛布のあいだにもぐりこむ。

仮眠室からは、いつも激しい息づかいや規則正しい床の軋み、あえぎ声が聞こえた。

鮫島は仮眠室の前で立ち止まった。その暗がりから転げるように若い男がとびだしてきた。

頬が赤くなり、鼻孔を押えた指の間から血が滴っている。

「たすけて……」

若い男は這うようにして、鮫島の背後に回りこんだ。泣きべそをかいていた。

鮫島は仮眠室の出入口に目を戻した。大柄な男が、若い男のあとを追うようにして現われた。若い男も、その男も、まっばだかだった。

あとからきた男は、四十代の初めくらいで、髪を短く刈っていた。若いときは筋肉質だつたと思える体に、その後の暴飲暴食を物語る贅肉がはりついている。胸や腹は色が白く、腕と首すじから上が、よく日に焼けていた。

男は鮫島に気づくと、立ち止まった。

「なんだよ」

低い声でいった。楽しみの邪魔をされ、怒っているようだ。鮫島が無言でいると、のぞきこむようにして鮫島の顔をにらんだ。

「なんか、文句あるのか」

鮫島を若造と判断したようだ。三十六の鮫島は、実際の年より十近く若く見える。理由は、

後頭部からえりあしの少し下にまでかかる長いうしろ髪だ。体にも贅肉が少なく、ほっそりとした印象を与える。ほぼ毎日、ジョギングをつづけている成果だが、決して貧弱な体つきをしているわけではない。

鮫島は、足にしがみついて震えている若い男を見おろした。

「なんだ、てめえ。いいたいことがあるのか」

「そういうたちなのか」

鮫島は、男を見つめ、おだやかにいった。

「なんだと？」

「殴つてするのが、好きなたちなのか？」

「だからなんだよ。人が好き好きでやつてることに口だすんじゃねえ」

男は一步踏みだした。鮫島は動かなかつた。男が鼻白むのがわかつた。

鮫島は若い男に訊ねた。

「好きか、殴られてするのが」

「いやだよ、痛いのきらいだよ」

若い男は激しく首をふつた。鼻血が、鮫島の足の甲に散つた。

「きらいだつてさ」

鮫島は男に目を戻した。

「この野郎……」

男は急にたんたんとした口調になった。

「ずいぶん、でけえ口きくな、ん？」

首を倒し、鮫島の顔、体をじろじろと見つめた。男の目が自分の左手や頬のあたりに集中して注がれるのを感じた。

鮫島は、男の職業に見当がついた。やくざではない。やくざならば、こうしたやりとりをする前に、手がでている。

「おまえ、ここに来るってことは、それなりにワケがあんだらう。いいのか？ そんなでけえ口きいて、ん？」

鮫島は黙っていた。

「俺はよ、楽しくあそびたくてきてんだよ。おめえみてえのに邪魔されると、仕事のことを思いだしちまうんだよな。どつかで見たツラじゃねえかと思つてさ……」

「そうかい」

「そこにちよつと、いてくれや。え？ 逃げんなよ」

もう若い男は眼中にないようだった。犬でも追うように、若い男を蹴り、ロッカー室に歩いていく。着がえているサラリーマン風の男をつきとばし、ふりかえった頬にほくそ笑みがあった。

鮫島がその場を動かないのを見て、満足げに歯をむきだした。ロッカーキーを手首から外し、ドアを開く。

「行ってるよ」

鮫島は若い男にいった。

「え？」

「休憩室にでも行ってる」

「でも……」

「鼻を冷やしてこい」

男が開いたロッカーに片手をつっこむを見ながら、鮫島はいった。

「すいません」

若い男はおずおずと鮫島から離れた。不安と怯えが、血でまだらになった、色白の端正な顔に浮かんでいる。

男が戻ってきた。手に黒皮の警察手帳をつかんでいた。

「お」

獲物がいなくなったことに気づき、男は立ち止まった。だが、あとを追うことはせず、手帳を鮫島の顔の前につきだした。

「だから？」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。